

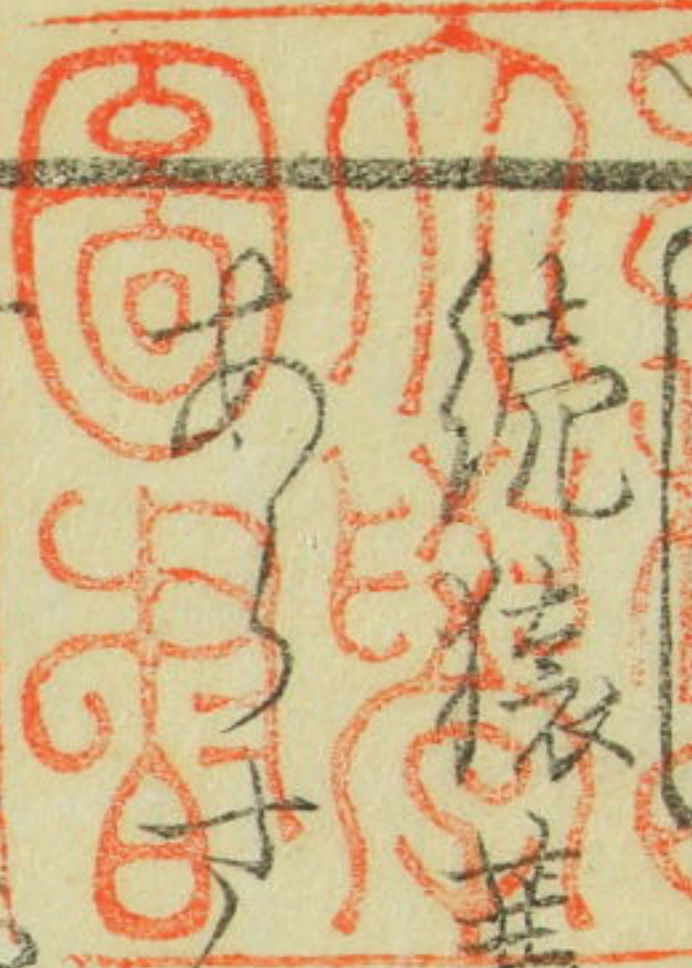
^ 5
4453



へ5
4453

門へ5
號4453
卷

昭和九年
十月一日
贈

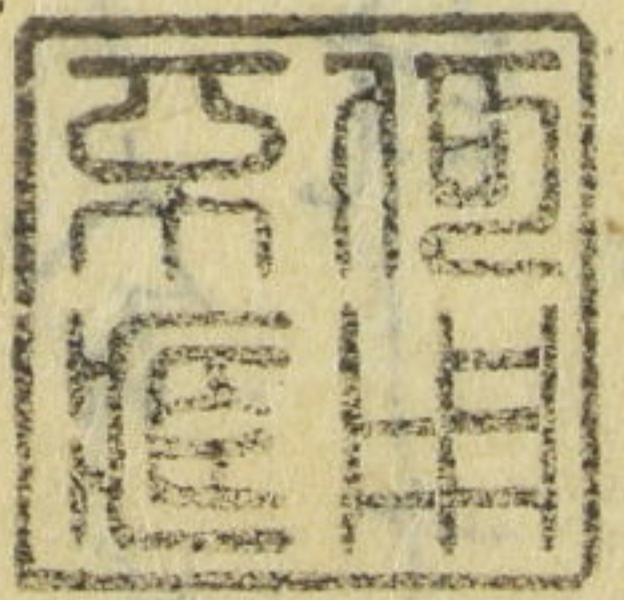


続猿蓑多七書乃部類下
 ありて行たしてて老父の省記
 すとて集かりするを大鏡
 撰釋乃折かゝるものよ書
 くたてて殆及古乃出とて
 是を以てて子於おのむと
 ちけかたゝゝ是は甚きと

すとて父すゝゆる也ゆやを
 ら門人誰かれと尔一人台せ
 ひそやのふ奇劇氏に説して
 小冊とたゝぬ父よゝあひすと
 いへる母すゝ祖翁乃俳諧と
 結ふたおのれを散て呵責
 乃沙汰もも及たる小よら
 本局何れ是よすまむやと

同盟乃諸子とつちのちと
永く藏してらすこの風流
乃助けとあすもの

尺本堂公石



Handwritten text in cursive script, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in cursive script, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

尺本堂公石
尺本堂公石

一書は田舎雨とてや音のぬく勝て時く日の降りぬあて
柳の多めは薄きハハ九層もそよ雨の降ん地しを何とぞと
曲のすくれなるはらり或能僧の来りて梅落ハハ九層もそよ
あつらひ詩人の常とてハハ九層もそよ色ぬらりとて云い

一書は云柳の糸は風はたのひまのあつらひとてハハ九層もそよ
ぬのつらやとてよめえぬらり
一書は云はる家々の悦びもあれも悲く月ひさしとて思ふ色
の降ふをそとち観しそよの九の老湯の静かして上りて
さきこと九天とてい雨とてさきより降るの之柳の降るさ後
ハハ九層もそよ降るい層もあつらひ
一書は云あつらひ柳の雨とてさきよめとてあつらひの貫との書
は欲して龜実のさきよめとてさきよめとてさきよめとてさきよめ
新のさきよめ小ゆ理てありさきよめ
ゆさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ

そく二

一書は云薄雲と竹下の三遷と會く越ゆるとてさきよめとてさきよめ
降りあつらひさきよめさきよめさきよめ

さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
川さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
一書は云強倉は露とてさきよめさきよめさきよめさきよめ
降りあつらひさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
情をつけしとてさきよめさきよめさきよめさきよめ

老所 杖の短きさきよめさきよめさきよめさきよめ
音 路乃息子女身ゆさきよめさきよめさきよめさきよめ
意味重云のさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
素庵さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ

さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ
さきよめさきよめさきよめさきよめさきよめさきよめ

一書云云草拈書殿疾と云る風情なむ蓋朝花集一
西章云々は斧鑿の痕を見ず

削やうしよは古刀坂の終り凡

一書云云草拈書殿疾と云る風情なむ蓋朝花集一
西の方と云ふありと云ふ考す

伴約言き入端取の雨
いき藤と賜つねと海り

一書云云八南人の名は藤一廿章の風情と云る
つさの

柳の情一門とたれたり
百姓は藤と世も古閑さ

一書云云五柳子の柳と云る。藤と合するや
藤裏よりわれらる栗の松葉の
日の草とられと藤と合する岡

そく三

一書云云巳の名の未集一藤と云る比鳥一と云る
らむむ替群は梅を忘る藤と合するや藤と合する
の藤より藤と云るは藤と合するや藤と合する
らの藤と云るは藤と合するや藤と合する
一して

一書云云後法師の雑談集子
藤のうらふふと藤と合する
藤のうらふふと藤と合する

一書云云曰伊賀の連気流の書國の書のかきまの
藤と合する藤と合する藤と合する藤と合する
藤と合する藤と合する藤と合する藤と合する
藤と合する藤と合する藤と合する藤と合する
藤と合する藤と合する藤と合する藤と合する

増補と云ふは、斯くの如く、斯の句も、ちりり、一、成る、よ、今、あ、氏、
ぬ、い、い、う、一、一、斯の、成、存、の、白、ち、も、ま、あ、く、出、せ、り、と、
不、審、之、と、云、く、悪、考、異、あ、ま、い、某、竹、人、の、撰、と、い、
ふ、を、あ、し、ひ、と、書、し、令、辨、名、成、存、を、通、さ、て、偽、作、
と、も、某、よ、り、七、部、の、別、と、も、一、つ、を、辨、は、續、後、表、の、
教、号、ち、り、い、い、句、と、社、卷、及、ふ、あ、れ、な、り、れ、書、ん、こ、の、
原、の、澤、く、守、り、さ、き、さ、う、と、あ、り、す、と、い、
多、及、神、の、基、こ、り、と、云、う、と、世、は、流、布、し、て、原、門、某、
と、い、く、七、部、と、云、う、人、も、あ、り、を、れ、く、と、云、う、
乳、一、と、け、さ、る、く、れ、一、三、等、と、云、う、原、門、某、の、假、名、
と、し、て、辨、る、と、云、う、い、と、云、う、一、つ、の、所、あ、り、定、哲、の、傳、
了、日

赤信の事も証發しあり、暮る、嵐、蒙、
山、依、と、切、く、く、け、る、関、の、表、
そく、四

世の中、酒堂

け、山、依、の、二、句、と、云、う、是、は、匪、梅、と、い、ひ、
関、の、撰、抄、を、能、在、善、の、文、句、は、引、み、お、も、
切、く、く、け、そ、い、き、只、お、守、り、
經、と、い、は、教、代、の、意、味、あ、
勝、と、い、は、お、後、と、い、
大、江、あ、り、二、日、あ、る、暮、の、後、
雪、か、ま、か、
一、書、よ、う、門、徒、よ、某、月、の、法、會、あ、り、と、
と、云、く、

一書よ云二親の令日と云々
か、り、身、下、帝、の、中、と、押、合、し、
け、あ、り、
悪、考、異、あ、ま、い、
と、云、く、

一書よ云二親の令日と云々
か、り、身、下、帝、の、中、と、押、合、し、
け、あ、り、
悪、考、異、あ、ま、い、
と、云、く、

字と服は附り常い大和風上常下常是常の始
了こと之はけあさりと前白くもして二句の局は
整々入道ぬゆりゆり又曰市ハ聖德太子大和國
之輪の里又云初五つと農家の者曰くはも道る百丹
よふ糸と空く佛法を中へあひ入

今月有賦

賦ハ布之給與也分界也責取也若愚ともよあ
陳補事よりして其情と形とたし明白に形容
しき文述る所分附来る一語と賦とのいふあ
何て物ぬまを一朱子曰直指其名叙に事之舊
覃志耳と然是也

衣裳は湖ありの形を合む

一書よむ林氏詩を三卷用ゆ合衣裳開上秋

志と

その心への

俗として俗はゆるもの

警僧之頂のうりうり一撮の毛を袖一並るり

晋書白蓮社記曰在僧在俗俗而在似僧者

其交の清きものハ沙河のくちり小松を

別くせらるめ一原かき福はすく一

且味なく一して人よ飽るり

管子曰古人交多詐偽無情實偷取

一切謂之鳥集之交鳥集之交初雖相驩

後必相咄

支考

吾考莊子曰君子之交淡如水小人之交甘如醴君子淡以
親小人甘以絶彼無故以合者則無故以離

やうしてさうしてよまわうしをい何の叶

好のよもちか〜

愚考杜律子曰明年此會知誰健

罪孟の教〜

愚考李白う金谷園の杯〜
王羲之う蘭亭の會罰酒者十人各詩成不の梵惠王
後群長作詩至吟答得孟

夏のあや〜

一書よ云水色と合あり〜
又彼の河秋〜池のすゝたるも〜
こ〜云く愚考水よひやせり〜
貴冷〜之ぬれ〜の酒〜
〜んまきぬぬ

考〜ユ夫〜

おれ〜事〜

杯佛の形〜

一説よ世々の〜
一書よ云考の〜

考〜ユ夫〜
の着の〜

何の橋も〜
考〜ユ夫〜

愚考考の〜
考〜ユ夫〜
もの字の〜

くつりやありあけとらつちも葉師の媚也や一り去
未多龍叔のら附ちきハ貴云の句よあて一思應の
工夫と夕日よて定めそ夕日よてや落橋の青角
と定めお佛ハ赤乃佛よとハなく通赤う本像其の
お佛なるも紅くハおれ付毎赤う本像をなうゆつて
平生昭毅一のお佛の顔とハ作らるもの之度年一
あわて思海のおり誠よ夕日の歌よ一。中の句の人
おり赤はよ悔くゆつて云の句の胸りとハ中ちり
天文志曰蒼高飛而定天氣一

森時かよ又又む月々初さく
一書よ云古よ一見つて集むすれさくくは
月のおもてふあらうはるるは

そく七

新よ仙ぬ 茂るもあよ神 橋
愚考杜子美詩よ曰鳥人性僻耽佳句語不驚人死
不休老去詩篇渾漫興春來花鳥莫深愁形よ仙ぬ
よき句もあよ云の句の趣と喜來れハ花咲香唱と
喜來花ハ則是秋掃之意味涼重也
或人神して曰詩の心よのみをのみて能楷の素とす
新あわら
陳して曰橋ハ赤紅の花をぬ佳句とをよ一り
人を驚さむと云ふ意ハ能楷の善ハ能成とや
又難して曰詩の心を智の能と述べて杜子美う糟粕
よあよとや
陳して曰詩の心を能と述べて別名人の能と云
古言ハ八字と僅十七文字の加なよつてめよ思一き
而又あよとあよと一一人同は

はなまのほろよほめて文君うぬ身も
破のまきまればよ思ひ出さるるよ

酒部へあやみ琴の音よ意の花

愚考 史記曰卓王孫至日中謁相如長卿謝病不能
往臨邛令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐
盡傾酒酣臨邛令前奏琴曰竊聞長卿好之願自娛相
如辭謝烏鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好昔故相
如終與令相重而以琴心挑之

人のまもかき窺ひ――まら橋

愚考窺ハハトと吟す――人の音もかかぬのこころ
かふらいやく――あけ極ハ窺ひと衆人のま
まらとのなまる句なり

愚考 窺ひのあおとまむ山さくら

愚考 窺ひのあおは別よ侍のまとかやま
そくハ

下線の侍愈より献上の二おより形丸く大小ありむ製
方のあ、その威事云も又之侍愈の云橋よよハ着
侍愈のあ

嘆かとも花や 飯三茶 玉十 ち

愚考 句よりて句よすりものち侍愈の内の人桂林
あけあきりち柳外柳ハみ人桂林の位外小庭に有さ
はぬハ橋むハ士以上の意あよりて五人桂林の
五とのうさひして五するハ侍愈をむものれんハ
――ハ侍愈の語ハ侍愈の

ハき橋 茶もらるる茶良茶外

公石云いすつる茶良の都のハ守橋より丸まをよ白
りハの奇の侍愈まらや
――云もやけきまのよ月と梅

愚考 宋詩の肉姚宋依りる又梅花好月大清香

里坊は雄まきくや梅の花
愚考惠慈和為行黄梅師五祖弘忍大師為行者在雅坊
并白之間於是大悟受衣法若嚴有為三祖唐憲宗皇帝勅
溢大監禪師

一書曰蜀の毛踏ちりて細腔と大長刀はさくつ
かけりてしるる奇の侍と云く
愚考長刀の附

大長刀はさくつ風そふく
と云く

愚考乃細腔斬の秘りふらむ
長刀の事ハ武用兵略曰白薙又も元来太刀なり
それハ少くもてつけて用ゆる故も長刀と書く
されハ長刀は限りて一振云曰建考祿曰曰光仁帝
兵城の兵器と扱へ作りてむ平信實云長刀の利を

そく九

まむし一門管をともゆあれりて全儀の兵器
と云く

愚考や柳のうらり萩の葉
愚考や柳のうらり萩の葉
一々何れも首の縁はのりまざる葉は柳と竹
をまきれりてえゆ

芳野西河の熊
熊のうらりすさす

愚考、まむしの熊と唱ふるあり五熊組は曰九魚之
游皆逆水而上雖至細之鱗遇大水亦捨而上鳥ハ凡
は逆みて飛ゆ

山吹や梅りやきる葉一葉
一書はま七葉ハ重花ハさけとも山吹のみひらり
と云くやそかき

小服綿光をやと也玉 椿

愚考小波係の来の乃むとの是のつき十倍よ
似るる照衣之考るとる別光明あり浮陀の光明ハ十二
光明之別按糸木捨の意之安安首首よ玉枝光成みく
君代よ百かつり嘆うとむけの苑

愚考淮南子曰陽之至是以春則群獸除角

え日や表源き衣のく表

愚考侍曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公名之
又夫未集よさらは海よあ書の衣をいてきは君
よつかよの身をいちめはは侍奇の意也へ

人も兄也喜也鏡の表也 椿

一書よ云伊勢抄終一月やあぬ春やむりけを
ならぬ衣身ひとらハかくの力よていかぬ衣敷の

そく十

梅の信香結矣又自ひて誰ら兄也 一ん只人よも
志しれさること事くはく梅よ衣力よとよとくとありと
下長りぬ衣敷也

一書よ云鏡の室の梅れ白と思くらりされとも衣力
乃信と思える人もなきい早鏡れらうと梅の花
かく侍付とるハあれと静と世の人の鏡乃面ハ見れ
ぞもうとある梅ハ見る人もなきぬ世よ志れぬ
との句也へ

一書よ云綿山よみ雪降る 一書よ云風志あり
香葉村よふは難波と鏡のうと引起て鏡の
うとと響く人も見ぬとらひひむひらとく
香葉草よと梅の異名也
一書よ云是人の人よ志れぬ乃鏡のうとらよ
鏡付 一書よ云梅と同一書よ云鏡の面たらハなる

しひよんもあつて強しかえくは脂か
むとあき身のかとを比ししもの吟中略
鏡の裏の挿梅のうらハ信明家集よりしもの
かみと強みそのかすもあつての中さ倅家集
尔鏡の裏は梅の形を詩つけて作りられハ寄又あや
ともあつていひのむいよまむ回唐のうらをを思ふ
る今俊明あつては書を本拠とせしれしハあつて
もはきは叶つてはつてハつてハつてハつてハつてハつて
やりしきりお他より又梅鏡裏より古梅ハあつてハつて
の形ハあつてのうら俊明より古鏡よりいよあつて
一書よ云墨梅の詩ハ瘦損昭陽鏡裏春と云
一書よ曰さるくの後ありと云さるりて梅高をい
いふハ易ハ良其背不獲其身行其庭不見其人無對と
いつるめく近思録存養類程子曰人の其止るは若む

さるり能き所以の者ハ欲ハ動けし中略ハ鏡の脊の梅
も則人の背れあし脊ハ立附もともさるりてハ但し
中しいさかも思慮たつてしとハはつてハつてハつて
脊ハ良るしと云ハるものすあつてはつてはつてはつて
をいふしと云ハる蓋は古鏡より求むる一章よハあつて
鏡の面よりつるものハ背も又さるりてはつてはつてはつて
附しハるさるりてはつてはつてはつてはつてはつて
雲時堂云居原楚辞強子曰世人不知鏡裏梅は吟ハ盤佳
後師いせの圃鏡のうらハ雲時堂いせと行つてはつてはつて
玉華集より
人かえあつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつて
昭々東乃不のりしと云ハるはつてはつてはつてはつてはつて
一書より白除あつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつて
をいふしと云ハる湖東問答よりいふはつてはつてはつてはつてはつて

五元集拾遺の事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
湖東同書より其角の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く
桓の或る事其の部より入らば今も其の部より
出さず改と云く

つらものゝとよみて云をと念すり時ハ老せりし
中苦しと哀しゆりしは假女子を念と入名し
は百余年を経たりと云

曉乃 雷とやまをりしや

同国空印寺ハ八百比
五虎の本堂有と云

愚考 ヒマウ之五雜俎曰電似是雷之大者但雨霰寒
而雨電不寒霰雖暗而電易晴如暝雨余在奇亭四月
之間屢見之不必冬也文書所載電尤有如桃李者如鷄子
者如谷者如斗者これハヒマウをまふまのをりしあり
酉陽雜俎曰木再花夏有電又慶安二年五月十三日武
川越下電一電之丈二寸小四寸あり人馬多死

愚のむなしむ

郭

愚考 僧聖徒、詩、燕子詩、原始到家社能常
處在天涯是等の意も似たり
浪、し、も、牧、田、く、な、け、り、社、宇

一書、の、云、百、奇、浪、ま、ら、牛、を、く、な、く、よ、時、を、浪、田、の、
啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ

愚考、を、食、の、奇、と、浪、集、の、く、し、ま、よ、う、ふ、例、あり
時、も、浪、の、意、も、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、を、け、り、む
く、し、ま、よ、う、ふ、浪、の、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、を、け、り、む

浪、る、の、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ

愚考、浪、る、の、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ、
ある、よ、う、ひ、か、け、る、も、浪、る、の、く、し、ま、よ、う、ふ、
よ、う、ひ、か、け、る、も、浪、る、の、く、し、ま、よ、う、ふ、
西京新記曰目脚得酒食一花得錢或乾菡呼而
行人至如珠集而百事喜

石、う、や、轟、の、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ

愚考、李、中、の、湖、あり、職、ノ、難、し、書、を、む、し、負、たり
名、海、の、入、り、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ、
蔵、人、の、難、子、を、く、し、ま、よ、う、ふ、啼、音、の、く、し、ま、よ、う、ふ、
和、名、抄、ニ、難

公石云古今の奇よ高人のくしまよふ啼音のくし

晋陶明之

寛形 皇朝の 書也 一 尊

一書の云晋陶明之と云はむとありて一席恩の画賛
なり傳曰陶明高彭澤懸金時郡守遣督郵至
吏白當束帶見之潜歎曰吾安不能者士不折腰向
卿里小兒耶即日解印綬屏去時屏去琴の辨
有奇行を和りしハナ音しを宮て出て里よ福く
披をるうしし也師を若涼しき句を翁のく
チナあつりしと云

愚考言解云陶明の傳のみししと云はる白の
を意味なりし是ハ彼陶明く五六月中北窓下臥遇
涼風警至自謂羲皇上人也と云ふは
なう山谷の卧陶軒の傳は陶公自預卧宇宙一北窓
又笑苑類藁二曰采菊東籬下悠然見南山其形影

十六

神三篇皆寓意高遠蓋第一之連廢也又鷗陽公曰西晋無
文章幸獨在此篇身活二姓仕仕良と云は宋文帝之
時也辛々年二千之緒節先生と諡と諡法曰采
德安衆と諡と云或曰恭己解言或曰寬身終各諡と
云好身自克と諡と云是等の意味と云ん全

今このこのひあの一室は原あつむ月のあつる乃みや
をたうひわうと花とあつむあつる
愚考新古今社の書て月の桂のひあをたうひわ
を花とあつむあつる乃みやは花あつるとい
と毎光りくと花とあつむあつる乃みやをたうひわ
とつひあの一室をたうひわを花とあつむあつる乃みや
狭い棒の白くしとてゆかを花とあつむあつる乃みや
りのく乃根と云ん月又

愚考 藤原正家 藤原下所守 五万石を領し其
者くの詞平人の白くありき

山多れしつとも其のや景の月

愚考 予は思ふを思ふてよりあるはあつて心多のかけを
時を音ハ唱れたる山多ハ表の樹は思ひをたす
今やしをあるとつり月は思ひを思ふと説い
てあつてもあるは思ひを思ふと説い

我よと老やつりありと又

お陰、秘しを思ひつりしを

やりのあや

姨 後をくやみよのりやりし月

愚考 之を思ふと姨後松坂園寺と信長家の傳
きも思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと
ありありありありありありありありありあり

川とくけ川りや 月乃女

云石を蓋子と白從流下而忘又謂之流從流而忘又謂之
連と云く流連荒と云行

和歌のまをくくや 其の氣

愚考 七夕のともを思ふのこ後一と云く一
哉世乃浪河の和歌より思ひと云く思ひと云く
よ曰崇安縣乃武惠山は石和歌有りて和歌の
しと云やされハ和歌の雲と思ひと云く思ひと云く
七夕のまをくくや 其の氣

愚考 長明は事お終よ曰七月はあされハ大宮
ありと云く御達限は連たのり思ひと云く思ひと云く
ぬ限ハかかりても思ひと云く思ひと云く
新しきを思ひと云く思ひと云く思ひと云く
一つをのひけハあされハ思ひと云く思ひと云く

くつらうらめいさき若侍さしひそくもあひのこも
とまきかゝるふせりさ秋をさしひらるるあひの秋よ
の秋ふしきいそをむ

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

馬骨あひ花ハ女子のあひは後集よりあひ花はあひ
花経くかきりきりあひのあひはあひ花の馬骨の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

公石は是別あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

一書云本草は津万株花風也花は使明流る彼ま

信もあひとあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

抱儀云古今集は秋のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の
あひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花のあひはあひ花の

あひ花経ひぬ馬骨乃すくす外

一書よまふは鳥集しよまてりくは鳴りり年の暮はほし
月うけりふけり薄葉はのちくとも冬るふれく
若くもくふさくあり新すのちもあつきのそ
とくもふ燃港の清鏡と

老の名わありくもちくはは子雀

一書よ曰すおの尺乃奇よおのう音よつてく
くこれの有くくまひもかけり音の響む
竹さりくかめりくは秋の風

一書よ耿澤く語よ古道く人け松風動来森のち
も有つてく

松のちや細きくも他は秋の音

是考野雨永叙く杜夢の賦日く身月皎潔明河
在天四無人夢聲在樹間曰嗚呼悲小世不声也これ
松風界とくくをくの計と

指書や 園のくくり五位の書

公石云く位夢の羽ハありくまある地くくは
園の方く飛やとく指書とくわけ合をくくもの
くくく

藤はりくく麻夢くは鳴るも

る将く曲とく人中山田の菴ちりくく鳴麻の音よ
響かきくそむくくくくかけ奇の心もあつぬ

農業

記一や一くく進りりそはの花

一書よま記一や一くく初初記一はくく
そはハ無田よ他くくのなるくハそはの花を
りよき切記一のくく終て進るくく

修家の中従は心家とくく

十年著一尉言其意也其意を留り終をり
條せぬ終りしは傳くぬ兼の友

五老揚去よ兼業の居士と々陶淵明より兼業
ハ為陽縣より招撫の能より兼法乃兼ハ淵明の
りしよりとらるり人見牛田先人の元源中の書傷
りしし書石を能く一聖事浩の筆跡より

一書もあふきぬ菊乃求
一書う云ふ上人様やうて命をたかしくハふふ
く乃あふきをりて陽りあり

兼云揚去よ兼業とありしを辨り長男乃
書授るり史記列傳よ兼一危難を次子器を
負ふてりりり金をとりて其器を傳人より入
長男や金を惜みて終りしと云ふ
この意を好ぶ人の速たしめりて一書あり

そく二

あふきぬ六例乃長男の志此やあふきぬを
化あふきぬ

本か 一や兼業す此ち予牛の角

かあふきのりよりつて予乃直風をより後
こふ直風をせりり乃二あり

一書り云兼業とありは貨廻の業事りて持
具は兼のあり解るかみの程言なりや

時の自し又く予りさしあく尋常乃部賣の
終りし日斗りて之を面白か地福人の余

お終りし日斗りて之を面白か地福人の余
よ一書り云兼業とありは貨廻の業事りて持

兼業も 鴨小 兼りりり

馬考 野の鴨も化(成) 考るるといふも
ふく 示雅二曰鴨ハ野曰鳧家曰野鴨を
すして馬といふ人ありはまを鴨をいふを
あつたりはまを鴨をいふをいふ

杜又莫や鴨をいふて一語一義

自由といふて古用の度係事草云杜又莫名鳥かぢ
許よち草指遠をいふていり方言俗語ハ大鳥
本草よ又いふていり鳥といふて鳥鴨をいふ河麻
ふ川よりゆつて鳥といふ一語巨大るりあり異
魚國後子所謂魚鱗といふりあり越あよ
この考を健鳥といふていり大鳥本草云本草
徳用といふり休見り川をいふていり鳥といふ
ちといふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
鳥といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥

鳥といふていり鳥

て道徳云江乃乃湖(一) 形河鮮は川に毛馬
毛を五子あり(一) 莫莫もいふていり古奇
よあり一説ごり乃大鳥を河麻といふていり杜又莫
鳥といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
杜又莫といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
日本親名云杜又莫河麻之山河もあひ鳥といふていり鳥
其の考をいふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
鳥といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
和漢三 止牟保同一名記石負土附負(一) 鴨鹿負(一) 土齋負
食物吐哺(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一)
鴨水といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥
かくづつ(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一)
秘んま(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一) 鴨又鴨(一)
鳥といふていり鳥といふていり鳥といふていり鳥

九しとれい高しすも思ふあり又一格あるべきを
しと粘りありのあり候なりと云ふなり
くはと云又どりなり河原と云結のこもり河原別
あり鳴こく之餘抄大志あり又ゆ

何事とも 疾入すなり 此食

愚考鶴林玉露より日林林莞草子備食と枕同一
宿也布袍蒲絮と詔衣衾給同一夜也知此則食幾
家貴可一視矣ゆ多丸或人詠して白ふまの句は
を河原をくも字ゆりてとて

陳しと云中めぬと句ハ一ツあり一は折りを
初附を何れ解也さしと也世人送をそりて字は
る中待さり予ハ句を解す其秘を摸写しと
意蒙も多て溢故初新を意て有権中内言通
後弭る流るかひちかす

そく三葉

かこも入り玉章新隆古今集よとてなり予はけ
入を入りぬと人々かゝる或古人の句を推し
るありとて頭をくまてとて

望人よあつておも有年の言

抱後云々世に人々ありてハ望やとてその
ちりも月夜斗も世を捨てふ果もありとの
余情ハ又ハあり

全人ま安後には所の多れとてとてなりとて
花の生塵よのけりなりとて

山幸や樹あり 疾る 但繁 依

忌考 義禁六帖曰樹とて二文羅刹廿中類最終
新氏位知不可言同者也とて山幸とて樹を
むとていとも別とてとて

灌佛や 秋也と 抱後と 促力と

馬考 櫻葉 遠きも 解成王の事なりて 阿羅の窟へ
釈也 浄修玉の事なり 善覚者ありて 以て
解成王 浄修玉の二玉あり 塚にありて 善覚二玉あり
のり 念をとりて 白くせり 櫻葉 遠きも 石三寸
射世の事なり けり けり 射山 浄修玉ありて 石を
取て 浄修玉ありて 善覚ありて 碑けて 一石
石併の事ありて 血ありて 多く

素より 子 杖 白 雙 の 墓 糸

一書も云 本州 文 操 又 櫻 葉 の 弁 々 下 の 句 下
ま ぬ る 事 あり けり けり けり けり けり けり けり けり
ま ぬ る 事 あり けり けり けり けり けり けり けり けり
より けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
荆 門 一 別 各 案 前 三 十 一 年 ぬ 善 中 一 歳 被 封 書 問
あ る けり 人 養 率 意 難 寤 中 八 年 一 名 あり けり

そく 二十七

つぎ

かま けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
首 の 骨 けり けり 福 書 の けり けり けり けり

馬考 浄念 結 けり けり 日 遠 宗 の 輪 蓋 寺 あり けり 人 刑 罷 けり
空 けり けり 首 の 骨 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
赦 免 あり けり けり 首 の 骨 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
ハ 既 日 大 刀 取 の 骨 あり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
左傳 日 賞 以 書 復 刊 以 教 冬 けり けり 不 延 罪 八 年 けり けり

浄 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

古 書 けり 白 神 の 骨 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
か けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
あ けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

旅人乃ちつらも似よ 枕の花

一書よ云乃紫よ恋おまはけよりの飯を茶まら
旅り一おまはけの夢よりるく馬車や旅旅也
夕の露森あつりく風紙の細くをたしるその人を
移らるるなり

説兼大念よ云は白ハ信守の信りや解しか
許六の親室よ小推の花乃あつりよ似よ木若の
旅りよ出りり白餅の信一白事以解意も融せ
寸花も旅人の信れよ似くく六ハかよるやま
川前乃乃んあつりくそく唯旅の不自ゆる白を
よみくくさるる都て世乃旅人を足りく長し海
の旅りよそくおまはけハすくく山甲不自ゆる
るよくくくくいひ推もおろくあまハ雨夜旅の枕乃
花の淋くく有るそりよ云つるも寝あそあ

そく三

ほくくくくを差乃雲よ今旅を其りく
よあつりつりつりすつり旅人のつらを旅
て旅の花乃さのまきさよ小推ひたつり
才の風流も面白あつりくひとくくは華戒を
合めくふるりて州ハ旅美集ま考つ五巻一具
のぬき師道乃あつりを懐くつりきも甲乙
旅人を許六くきくそくあり世上の
旅人のゆきを先考て云あつり類くつり
上旅の花乃心すも似よ木若の旅又くく人の旅
よもたつりく木若の禮ま句一白よ水の定すつり
くくくくくくく今旅旅の形見よあつり
をくくつりくく

旅りよあまの草をさつりく
思考つらよ白頭旅くく善食哉旅三葉貫女莫

我首願遊將去世適彼東土頑氣く愛得我
所去の志りして古邦よかふるあつたをなぐさうて
ましそき辛そくも氣もくくつれくそくはふくくく
くゆくはま流矢の細骨頑氣を氣り愛怨せ
あり

福書や浮世をとろく 珍席をさ

子將云あふ人於此山より世をよりるよりすそ
くくのみよわくり申くあふぬぬもさるく福書
乃あつそる世のり流矢りとい祝くくむりの
を

又春の庭ひくけハ新き

馬考西行上人二足よちるくくく以商を又甚く
て新奇を縁くあひんむらの流矢り
極よ毒を情くく林よ小豆粥

くく二十九

抱後云太平御覽曰正月十九日作青粥以咽門
又事又類聚の白別里風俗正月暨日祭門先以楊柳
挿門陸揚柳枝新箱仍以酒脯飲食及豆粥挿箸
而祭之又拾芥抄曰正月十九日亥時煮小豆粥为天
祭之方中東土則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年
疫氣一掃出よくくくくくくくくくくくくく

公事根源曰寛平年中は揚て煮く

者うりて名をななのくくする付外

けのふみち者うりくと信書まきやり彼さる柳
柳のさるるの痛くぬく一應はハ中のく毒んささ
くは地すくたす割くくくくくくくくくくくく
けりての方志のくくくけ方より揚かた家
くくくく者うり候ハ白乃強向くくくくく
先者なかり候極本く毒その風俗を念する

萬物異名	俳論語	芭蕉翁句解	續猿蓑注	七部解大鏡
全二十五冊	全二冊	全五冊	完	全八冊

上巻ののりの中を指す是乃奇なる事或や社奉の
 人乃あつて若しりそのの契すもかや院
 疑感たつたささきとん

月院社藏板
 三

藥

品

蠱

海

近刻

全八冊

月院社藏梓

酒茶名目一覽

全四冊

酒異名

二千二百八十

盃異名

千二百五十

茶異名

千五百四

七部解大鏡

全八冊

續猿蓑注解

完

再考近刻

七部解小鏡

月院社藏

文政六癸未年十二月

京都書林

寺町通二条下几町

浦井徳右衛門

野田治兵衛

日本橋通二町目

野田七兵衛

内前書林

中立賣堀川東江入

